

あれ、そのコーヒー、捨てちゃうの？ うん、ぼくちょっと徹夜してたからね、その～、寝過ぎてフライトに乗り遅れないよう——そのカフェインを拝借できたらなって思ってね。ありがとう。ぐえ、なんだこりゃ、いや、君がなんでこれ飲み干さないのか、よくわかったよ。生乾きの洗濯物、しかもこりゃ靴下、いや、ぼくの靴下の味じゃないか。いやいや、ぼくはコーヒー通ってわけでも、コーヒーの専門家ってわけでもないんだけどね。インスタントだってかまわない派なんだ。スターバックスだとか、オー・ボン・パンだとか、その違いもさっぱりわからないしね。ぼくの母さんなんかは、その違いにことごとんこたわって、なんだか、人生かけてる感じだったけど。それに、イタリア人のスノビッシュな友人たちときたら、インスタントのアメリカンコーヒーに舌先をつけるぐらいだったら、ヤギのつばでも飲んだほうがまだ、なんて言ってたね。いやいや、ほんと、アメリカンコーヒーもラッキーな奴だよ。そいつらイタリア人の舌と言ったらもう。まあ、でも、ヤギのつばだって、案外おいしかったりしてね。ははは。いや、つまらない冗談ですまないね。ぼく、ちょっとおかしいとこあるから。ま、それはともかく、君、ヤギを見たことあるかい？ ぼくは確かにあるんだけど、それがいつどこでだったか、思い出せないんだ。たぶん、動物園だったと思うのだけれど。でも、それがどこの動物園だったか、思い出せないんだ。う～ん、ヤギとの遭遇なんて、思い出深くないんだろうね。おや、この味も慣れてくればなかなかのものだね。なんだか眠気も覚めてきたぞ。いや、感謝、感謝だ。ぼくたち、同じフライトに乗るのかな？ 君はどこに行くの？ あれ、そうか、じゃあ違う方向だ。そりゃ最悪だな。なんであんなとこ行くんだい？ 仕事？ それともレジャー？ え、君はあっち出身なの？ ごめんね。君がまさかあっち出身の人だなんて、とても見えなかったから。あれ、ちょっと待って。ぼくたち、どこかで会ったことなかったかい？ ほんとに？ う～ん、ぼく、前にここであっちの人に会った気がするんだけど。長い間、ぼくはこの空港でたくさんの友人を作ってきたんだ。ま、とにかく、じゃあ君はこれから故郷に帰るところなんだね。家に帰って、いいことだと思わない？ でも、ちょっと言わせて——なんかちょっと矛盾してると思うかもしれないけれど——家を離れるってことも、これまたなかなかいいことだと思うんだ。いや、誤解しないでくれよ、別に家に問題があるってわけじゃない。ぼくはただ、旅が好きなんだ。空に浮かび続けること……そう想像するのが好きでね。まったく着地しないんだ。そりゃ飛び立てば、いつかどこかに着地しなければならぬことぐらい、知ってるよ。今日乗るフライトだって、離陸したあとは必ず着陸する。そんなことは知ってる。でも、ぼくは、あの宙ぶらりんな気持ちのことを言ってるんだ。どこにも属していないような、でもそれでいて、どこにでも

属しているような、あの気分。ぼくはあれが好きなんだ。だからぼくはこうやって旅を続けている。君、友だちはたくさんいる？ そりゃよかった。でも、ぼくが考えている友だちってのは、たぶん、もうちょっと守備範囲が広いんだ。堅い友情、ベストフレンド、仲間。毎晩一緒に食事をしたり、バーで時間をつぶしたり、そんな類の、君がいつもやってる友人関係ってのがあつたでしょ。ぼくにもたくさん友だちがいるんだけど、こうやって旅してるから、減多に会わないんだ。実際、世界中に友だちがいるんだけど、しかも、そのほとんどがとて親しくて、義兄弟や、義姉妹のような感じなんだけれどね。でも、減多に会わない。君は血気盛んなフェミニストじゃないよね？ よかった。いや、別に君がフェミニストだってかまわないんだけどね。ぼくは彼女らに同情するし尊敬しているけれど、ただ、あまり血気盛んになられても、ってだけでね。ぼくが我慢ならないのは、あの、妙な血気盛んさであつてね。なんであれ、そうはならないでくれよ、いいかい？ オーケー。何を話していたんだっけ？ ああ、そうそう。友情について。ぼくにはね、スペインには偉大な友人がいるし、台湾には素晴らしい仲間もいるし、スリランカにはお坊さんの、ドイツにはカソリックの僧侶の友人がいるんだ。信じられる？ すっごい聖なる友人たちでしょ！ それに、聞いてくれ……なぜ、どうやって、なんて質問しないでくれよ、でも、メキシコの刑務所には有罪の判決を受けた殺人者の友人がいるんだ。殺人者といえませんが男性だと思ふかもしれないから念のため言っとくけど、この人、女性だからね。彼女、おそらく、死刑の判決を受けたんだ。もう、死んでいるかもしれない——何ヵ月も彼女から便りが来ないし、わからない。そうじゃないことを願うけれど。人は、意図的に悪さしたり、法を破ったり、他人の命を奪ったりするわけじゃないと思うんだ。ただ、過ちを犯してしまっただけなんだ。ただ、彼らは弱くて、その弱さに負けてしまった。そのこと自体は、とてもノーマルなことだと思うよ。それが人生さ。でも、ジョージ・ダブルファッキング・ブッシュやオサマ・ファッキン・ビン・ラディンのような奴らは、ぼくに言わせれば、くそつたれだね。彼らは、絶対に、ぼくの友だちではない。イタリア人の友人の舌をもってしても、ぼくは彼らに触れることはないね。実際、この地球上に彼らしか残されていなかったとしても、ぼくは彼らとじゃなくて、むしろヤギと友だちになるね。でももちろん、奴らはヤギにさえ爆弾を落とすだろうけどさ。くそつたれめ！ ヤギぐらい、ほっといてやれ！ おっと、ごめん。池で泳ぐとか、新鮮な果物をひとかじりするとか、そういった単純な喜びに満足できない狂った奴らのことを考えていたら、まったく興奮してしまつたよ。奴ら、チョコレートアイスクリームの味を知らないのかね？ もし知っているんだつたら、クリーミーで、ちょっぴりほろ苦いチョコレートアイスクリーム、あれをゆつ

くり楽しめる平和な世界に住みたいと思わないものかね? くそつたれめ! おっと、ごめん。とにかく、ぼくが言いたかったことは、ぼくは時々、何年も友人たちと会わなかったり、連絡を取らなかったりして過ごすことがあるってことなんだ。それでも、ぼくは彼らがそこにいることを感じるし、彼らもぼくについて同じように感じているのだと思う。ぼくは、いつだってここにいるんだ、彼らのためにね。ぼくの言っていること、わかるかい? 彼らの存在は常にぼくの中にあるんだ、ぼくが存在が彼らの中に存在するように。それは、とても純粋なことなんだ。例えば、もし、ぼくらがここに3時間以上座って、なんだか精神の交わりを感じるような会話を楽しんだとすれば、ぼくは疑いなく、君を大の親友だと思うし、それ以後、君はぼくの心に留まるだろう、たとえそれが、たった1回の出会いだったとしても。生涯で1度だけの出会いだったとしてもさ。実際、ぼくの友人のほとんどは、そんな出会いで知り合った友人なんだ。人によっては、そんな関係は薄っぺらくて、意味がないと思うだろうけど。記憶に留めることのほどじゃないと。日常のなんでもないことだと。ぼくは、その考えもよくわかるよ。多くの人は、自分の利益のために友人を作るからね、それが意図的ではないにしても。彼らは欲深いんだ。多くの人は欲深い。この地球上の大問題のひとつだよ。欲深い人たち。ただ会話を楽しみ、微笑みをかけあい、笑いを共有し、そして別れて、その楽しい思い出を永遠に留めておく、そういつたことができないんだ。無理。とにかく、電話したい。伴侶が欲しい。独りで買い物できない。独りで映画が見られない。失恋したら慰めが欲しい。会社をクビになったら、その不幸を誰かに聞いてもらいたい。ともあれ、ぼくが言いたかったことは、ぼくらなんかでも親友になれるってことさ。そう思わないかい? それも、すばらしく純粋な意味で。そこにかかっている彫刻作品のようにさ。見える? そう、なんか、鳥に似せているようだけれど、なんか骨ばったニワトリみたいな奴。えっ? フェニックス? そう見える? まあ、なんにせよ、たぶんあれは何に似せたわけでもないだろうね、ただの飾りさ。あるいは、抽象的な彫刻なのかもね。なんでもいいや。ぼくの意味するところはつまり、それはただそこにあって、それ以上に深い意味も、永続的な意味もないってことさ。作品を制作した人にとってみれば、それは何かを意図したものなのかもしれないけれど、ぼくらにとっては、それは単に、コーヒーを飲みながら出発の時間を待ち、そして家に帰る前に、ちらっと見るか、見ないか、ただそれだけのものなんだ。それだけだって、ぼくには十分なことさ。ぼくはこの単純で、興味を持った人にだけ一方的に楽しみを与える鉄の彫刻を崇拜するね。重要なことに、この作品はぼくたちに何も要求してこないんだよ。そのことだけでも賞賛に値するよ。人によっては、醜悪

な作品だと思うかもしれないし、人によっては、その存在さえまったく気づかないかもしれない。でも、ぼくのような人間にとってみれば——君についてはわからないけれど——これは、なにか心の安らぎを与えてくれるものなんだ。空港の彫刻を人間関係にたとえるのは奇妙に聞こえるかもしれないけれど、でも、すべてのものは、ぼくらに、ぼくら自身のことについて何かしら教えてくれるんだ。知ってるかい? 今ぼくはそのことについて考えている、ぼくの多くの友人、ぼくと同じ時代を生きている人たちみんな——ぼくは自分たちをひとつの移動体として考えるのが好きなんだけれど——は、たった今、世界中のどこかの空港にいるのかもしれない。素晴らしいことだと思わない? 考えてみてよ。ぼくたちは同じところにいなくて、常に移動していて、会わないでいて、でも、同じ状況に置かれていて、同じ時間を過ごしていて、同じ環境にいて、似たような行動をとっているという意味で、とても近くにいる。言い換えれば、精神的にとっても近いところにいる。ぼくは肉体的、物理的な近さよりも、そのことに価値を置かね。君はこれまで、誰かとベッドをとみにしているのに、どうも孤独だと感じたことはないかい? だったら、ぼくの言う意味もわかるだろう。ぼくのスペインの友人は、今ごろどこかの空港でコーヒーを飲んでるかもしれない。彼のコーヒーは靴下みたいな味じゃないことを祈るけれど。これを見てよ。ぼくの、つまり、君の、元君のコーヒーも、もうすぐなくなる。ぼくは、それさえもう懐かしく思う。ぼくにはきつと、もっとカフェインが必要なんだ。えっ、君、もう行くのかい! そりゃ最悪だな。あまり君の邪魔にならなかったことを祈るよ。ぼくはとっても楽しんだよ、ぼくたちの会話……その、ずっとぼくが一方的にしゃべっていたから、君にとってこれは会話と呼べる代物じゃなかったらうけど。まっ、ぼくは君の存在を楽しんだとでも言おうかな。そう、それ。君の存在。それから、コーヒーもありがとう。いろいろありがとう。君がぼくのことを忘れても、ぼくは気にしないよ。まったく気にしない。でもたぶん……たぶん、次に君が空港で独りでコーヒーを飲むことがあったら、ぼくのことを思い出さうね。もし思い出したら、ぼくのことを友人だと思ってくれ、たとえそれが、君が故郷へ帰るまでの、ちょっとした時間だったとしてもね。ぼくはそういうのが好きなんだ。ぼくのことを、君の間違いコーヒーを飲み、ヤギを好み、壁にかかった彫刻を賞賛していた男だと思いでしてくれ。それでぼくはハッピーになれる。ぼくも君のことを覚えておくよ。いや、実際のところ、もう覚えているけど。

ブラーブダー・ユン(作家/編集者、タイ)

(吉岡憲彦訳)

My Contemporaries are All at the Airport

Prabda Yoon

Are you going to throw that coffee away? I stayed up all night just so I wouldn't miss this flight — I could really use some caffeine. Thanks. Whoa! Now I know why you didn't finish this. It tastes like damp laundry, especially socks. My socks. Mind you, I am not a coffee expert. And certainly not a coffee freak. I don't even mind instant. I wouldn't be able to differentiate a Starbucks from an Au Bon Pain even if my mother's life depended on it. Some of my snobbish Italian pals claim they would rather drink goat spit than to touch American instant coffee with the tip of their tongues. Lucky for the coffee, I tell you! Those Italian tongues! Well, who knows, maybe goat spit is delicious. Are you going to throw that goat spit away? Ha ha. Pardon my lame sense of humor. Maybe I'm a tad wired. Anyway. Have you ever seen a goat? I'm sure I have but now I can't recall where or when. Probably at the zoo. Then I can't remember which zoo. Oh well. Encounters with goats are not that memorable, I guess. Anyway. This thing is starting to taste all right once I get used to it. Important thing is it's waking me up big time. Thanks again. Are we going on the same flight? Where are you going? Oh. Nope. Different destinations. That's too bad. Why are you going there anyway? For business? Pleasure? Oh, you're from there! Sorry. It's just that you don't look particular like you would be from there. Wait a minute. Haven't we met? Are you sure? I think I have met someone from there at this airport before. I have made quite a number of friends here over the years. Anyway. So you're going home. It's nice to go home, isn't it? Well, but I have to tell you — and you may find it a little odd — I find leaving home quite nice too, almost as nice as returning to it actually. Don't get me wrong, though. I don't have any problems at home. I just like to travel. To hover...I like to think of it that way. To not land at all, you know. I mean, I know I always have to land somewhere sometime. The plane I am taking this morning will take off and then it will have to land. I know that. But I am talking about the feeling of suspension. I love that feeling of not belonging anywhere but at the same time I feel I belong everywhere at once. That's why I do this, travel like this. Do you have many friends? Good for you. But you know what I think is kind of overrated? Tight friendships. Or best friends. Buddy-hood. You know, the kind of relationship in which you socialize all the time, have dinner together every

night, get wasted together in bars, that kind of thing. I have a lot of friends too but because of what I do, I rarely see them. I have friends all over the place in fact, and most of them I consider very close, very blood-brotherly, or blood-sisterly, or whatever. You are not one of those whiny feminists, are you? Good. I mean it's okay if you are a feminist. I have complete sympathy and total respect for that. Just don't be whiny. It's the whining I can't stand. Don't be a whiny anything, all right? Okay. Where were we? Oh, right. Friendship. I have great friends in Spain, I have a wonderful pal in Taiwan. A monk in Sri Lanka, a Catholic priest in Germany. Can you believe it? Such saintly friends! And listen to this...don't ask me how or why, but I also have a good friend who is a convicted murderer in a prison in Mexico. It's a she. In case you automatically thought murdering was strictly a man's profession. She's probably going to get the death penalty. She could be dead already — I haven't heard from her for months. I don't know. I hope not. You know, often people don't mean to be bad or break the law, let alone take the life of another human being. They just make mistakes. They are just weak, and they are defeated by their own weaknesses. I think that's very normal. That's life. But then there are people like George Double-Fuck You Bush and Osama-therfuckin' Bin Laden, who, in my mind, are equally nuts. They are definitely not my friends. I wouldn't touch them with my Italian friends' tongues. In fact, even if they were the only persons left on the face of this earth, I'd rather socialize with goats. But of course they would bomb the goats too. Those bastards! Leave the goats alone! Sorry. I get all worked up when reminded of those deranged idiots who can't just be satisfied with the simple pleasure of a good dip in a pond or a bite of fresh fruit. They have to go and kill people! What's wrong with them? Have they not heard of or tasted chocolate ice cream? If they had, wouldn't they want to live in a world where they could enjoy that bitter/sweet, creamy chocolate ice cream in peace? Idiots! Sorry. Anyway, what I was trying to say is that sometimes I go years without seeing or communicating with my good friends. Still I know they are always there and I hope they feel the same about me. I am always here. For them. You know what I'm saying? Their presence is always within me, as mine within them. I think that's just so pure. For example, if

we sat here together for three more hours and had a great, soul-connecting sort of conversation, I would without a doubt consider you a good friend and would keep you in my mind thereafter, even though it might be our only encounter. Even if we were meant to meet only once in this lifetime. I met many of my friends like this, in fact. I know some people might look at this kind of relationship as flaky or pointless. Not worth remembering. More of a non-event. I understand that point of view. Most people make friends for their own benefits, even if they don't do it intentionally. But they are needy. Most people are needy. It's one of the main problems on this earth. Needy people. They can't just enjoy a chat, exchange smiles, share some laughs, and then part, keeping only the good memories with them forever. No. They want to call. They want companionship. They can't shop alone. Can't watch a movie alone. They want consolation when heartbroken. They want someone to hear them curse after being fired from a job. Anyway, what I am trying to say is we could be great friends. Don't you think? And in a nice, pure sense. Like that piece of hanging sculpture up there. You see it? Yes, the thing that tries to resemble a bird but looks more like a skinny chicken. Oh, a phoenix? You think so? Well, maybe it's not meant to look like anything, just a piece of decorative art. Or abstract sculpture. Whatever. What I mean is that it is just there for no profound or lasting reason. Maybe it has some meaning for the guy who designed it but to us it's just something to look at, or not look at, while we drink our coffee and wait to leave, or to return home. Yet that for me is good enough. I worship this steel sculpture for its simple, well-intended, one-sided offering of pleasure for anyone interested. And the important thing is it demands nothing from us. I admire it for that quality alone. Some people will find it ugly of course. And some will not notice its existence at all. But for those, like me — I don't know about you — it provides a kind of mind-ease. It may sound strange to you that I compare an airport sculpture to human relationship, but I believe that everything can teach us about ourselves. You know what? Now that I think about it, it's possible that most of my friends, my contemporaries — I like to think of us as a movement — are at airports somewhere all around the world right now. Isn't that great? Think about it. We are not in the

same place, we are moving, we don't meet, yet we are so close in the sense that we are in the same situation, same timeframe, same kind of setting, doing very similar activities. In other words, we are close in spirit. I value that much more than being close physically. Have you ever been in bed with someone and felt completely alone? Then you know what I mean. Perhaps my Spanish friend is drinking coffee at a terminal in an airport right now. I hope his coffee doesn't taste like socks. Look at this. My, I mean, your coffee, your ex-coffee, is almost finished. I'm starting to miss it already. Maybe I still need more caffeine. Hey, you have to go! That's too bad. I hope I haven't been too much of a bother to you. I really enjoyed our...well, I guess you can't really call it a conversation since I was the only one jabbering away. I enjoyed your presence then. That's right. Your presence. And thank you for the coffee. Thanks a lot. I won't mind if you forget me. I won't mind at all. But maybe...maybe you will remember me the next time you sit alone with a cup of coffee at an airport. If you do, you can think of me as a friend, if only for that brief moment while you wait to leave or return home. I'd like that. Think of me as the guy who drank your bad coffee, the guy who liked goats, the guy who admired a lifeless hanging sculpture. It would make me very happy. I know I will remember you. Hey! Guess what. I remember you already.

Prabda Yoon (Writer / Editor, Thailand)